

いつの日か、握手を

熊谷 滋子

寿岳章子さんとの出会いは、突然で、また心あたたまるものでした。学生時代からの言語研究に限界を感じつつ、フェミニズムに関心を持ちながらも、どう研究に結びつけていいのか、もんもんとしていた時期でした。そんな時、あることで現代日本語研究会がワークショップを蓼科で開くから、参加しないかとある知人から、その3日前にお誘いをうけ、まったく真っ白な状態で、しかも、心うきうきと、当日を迎えました。蓼科のセミナーハウスに着き、ある部屋で待つことになり、その部屋の入り口近くに行ってみると、中から、多少茶目っ気のある、そして、楽しそうで、しかもよく通る明るい声がしました。その声がまさしく寿岳章子さんだったのです。お名前は知っていましたが、こんなに近くで「お会い」できるとは夢にも思っていませんでした。心の準備がないまま、部屋に入ったら、ひとこと、ふたこと挨拶の後、こちらの緊張を知ってか、寿岳さんは、「ご出身は？」と、きさくに聞いてこられました。東北出身の、しかも小さな田舎町のことゆえに、日ごろから、自分の出身を語るのになにか引け目を感じていたため、例によってアバウトなこたえかたをしていたら、「岩手のどこですか？」と食い下がる気配がありました。あれ？と思っていたら、なんと私の出身地に近い町の人と学生時代に同じ下宿で、今でも交流をもっているということでした。本当にびっくりしましたが、その後も、講演などで東北弁の「おぼんでがす」という（夜の）あいさつなどにふれ、東北弁のあたたかさについても語ってくれ、京ことばという雅な世界とは対極にあると思われている東北弁にあたたかいまなざしをもっておられることに、今さらながら寿岳さんのことばに対する姿勢を感じることができました。

寿岳さんは、『日本語と女』（岩波新書）に、丹波の女性たちとの交流を力強く綴られ、農村地帯の女性の置かれた立場を見事に表現されました。その中で、丹波の女たちが血のにじむような活動を通して生み出した教訓として、

「かなんことはかなんと言おう」「自分が変わらんことには人は変えられん」
「一番言いにくいことを言いにくい人に言おう」をあげています。これらの
教訓は、女性にとってなかなかできないこと、ましてや、農村地帯の女性た
ちがそうすることがいかに大変なことであつたかを知っているからこそ、
寿岳さんの印象に残ったメッセージであつたのだと思っています。今でもこ
のことは私にとって大きな課題であり、寿岳さんのあげたメッセージを実現
できるようにと、つねづねフットワークをしながら、何十年かかってもいい
から、その時を迎えたいと心ひそかに思っている私です。その時にまたあら
ためて、丹波の女たちと交流してきた寿岳さんに心の中で握手を求めたいと
思います。

(くまがい しげこ)

壽岳先生の思い出

小林美恵子

現代日本語研究会では、研究者は対等ということで、夏のワークショップのときなど、互いに先生とは呼び合わない申し合わせをしているが、やはり私にとって壽岳さんは別格、どうしても壽岳先生と呼びたくなる。

若い院生時代あるいはその直後、国語学会などで壽岳先生を遠くから眺めていたのを思い出す。まだ『日本語と女』が世に出る前、だから先生は私にとっては遠くの高みにいらっしゃる国語学者で、近づいてお話を申し上げる勇気もなかった。その後、蓼科のワークショップに先生が来てくださるようになり、何年にもわたって講演をしていただき、気さくな先生と一緒に食べたり、お喋りしたり、車の運転をしてさしあげたりという関係が持てたことは私には得難い喜びだった。

ちょっとお話を聞くと、偉大なご両親を敬愛して反抗することもなく一生を過ごした、いかにもお嬢さんという感じもするが、そのいっぽうで父母に背かざるを得ないような人生への理解も深かったし、そのような人生を歩ませる社会への反骨精神は多分先生の中では家族ぐるみのものとしてあったのだと思われる。それが丹波の女たちとの絆ともなり、憲法への発言や、そして何よりことばの世界を通じて常に女たちをバックアップするような研究につながり、今も私たちを励ましてくれるのである。

10年近く前、京都向日市の先生のお宅に泊めていただいたことがある。親譲りの民芸調のお宅で手作りの夕飯をご馳走になり、沢山の本に囲まれた部屋で休んだ。それも懐かしい思い出だが、そのとき何より驚いたのは70過ぎの先生が深夜まで仕事をされていたこと。翌朝うかがうと3時まで起きていたとのことだったが、まったく疲れを見せないご様子に、本気で仕事をし何かを成し遂げる人の持つエネルギーを実感、敬服した。

こんなにお元気な先生は、いつまでも私たちに指針を示してくださるものだと思っていたが、時は残酷に過ぎ去る。2003年の桜の季節、やはりお宅にお見舞いにかがいがい、近所でお花見を一緒にしたのが最後の思い出と

なってしまった。

毅然として生き、私たちの指針ともなる研究を残してくださった先生の仕事を受け継いだ地点からさらに発展させ、この社会で生きている人々とつながる研究をすることこそが私たちに遺された仕事なのだと思っている。

(こばやし みえこ)

寿岳さんのエッセーから

佐竹 久仁子

寿岳さんには専門の国語学の分野以外にもエッセーなど多数の著作がある。話題は、ことばの問題、女や障害者、差別、平和、憲法、教育などの社会的政治的問題、季節の行事や植物、食べ物、京の町のこと、両親や寿岳家の話など多岐にわたる。今回、書棚から何冊かのエッセー集をひっぱりだして読み直してみたのだが、つづられた文章のそこかしこから寿岳さんの人間性があふれでていて、あらためて寿岳さんに会った思いがする。エッセーから読みとれる「寿岳さんらしさ」についてすこしばかり記してみたい。

寿岳さんは話(講演)を頼まれたとき、原稿やメモは一切用意しないで話すのが常だった。つぎからつぎへと淀みなく出てくることば、しかし時間ぴつたり終わる。おしゃべりの達人なのである。文章もやはり饒舌で自由闊達、おしゃべりと文章とのあいだに断絶を感じさせない。文章から寿岳さんのおしゃべりの声が聞こえてくるように思えるのは、ひとつにはオノマトペの使用によるものだろう。関西人はオノマトペ好きだとよく言われるが、関西ことばの第一級の使い手である寿岳さんもちろんその例にもれない。深刻な問題も専門的な話題もオノマトペを駆使したおしゃべり文体でわかりやすく親しみやすく語られる。まさに「文は人なり」である。

エッセーの話題はさまざまであるが、それらをつらぬいている柱は人の暮らしと生きかた、よく暮らすこと、よく生きることへの強い志向である。たとえば、「いやしんぼう」を自称するだけあって、エッセーには食べ物の話題が豊富である。しかし、それはいわゆる美食家がうんちくをかたむけて語るという種類のものではない。オムレツや五目ずしなどの母の味、京の野菜や漬物や菓子、戦争中のひもじさのなかでの食べ物、その他もろもろの食にかかわる話が出てくるが、いずれも食べ物自体についてのうんちくというより、具体的な人に対する思いのこもった暮らしにかかわるエピソードとしてつづられる。『京都 町なかの暮らし』に「京都、わが家の食べぐらし」という一

章があるが、この「食べぐらし」という名づけは寿岳さんの関心のありかをよくあらわしている。また、「平和が守られてこそその味生活」（『出会いに生きる』）という見出しもある。食べ物話題にしながら、焦点は暮らしと生きかた、そしてその主人公である人間にあわせられるのである。

寿岳さんは「がんばる」大好き人間であった。「養護施設でがんばっている若い人たち」、「がんばって生きている多くの友」、「公務員として地道にがんばっている女性たち」、「二十六年にわたる農村の婦人たちのがんばりの歴史」……。エッセーには「がんばる」ということばがなんと多く使われていることか。「みんな、がんばりましょうよ」と呼びかけ、「女の子よ、がんばって人生の階段を上がってくれ!」とエールを送る。寿岳さんは「がんばって生きる」こと、「がんばって暮らす」ことを訴えつづけた。差別をはねのけて生きる、平和を求めて運動する、憲法を暮らしのなかに生かす、「お前、主人」のない民主的な家庭をつくる、「かなんことはかなん」と言う、すべてががんばって生きること、がんばって暮らすことであった。その源は両親である寿岳文章・しづ夫妻と両親の築いた寿岳家の生きかた、暮らしかたにある。

「この世での男と女の結びつきとしてはまず純粋に美しく、この世に愛というものがあることを人に信じさせるような結婚生活」を送った両親の真摯な生きかたと理想のある暮らし。それは「ゆたかに、言いたいこと、言うべきことはトコトン語りつくされる」寿岳家のありかたとともに寿岳さんのエッセーの核となっている。しづさんの翻訳にオルコットの“Little Women”（『四人の少女』岩波文庫）がある。愛にあふれた家庭への共感があつての翻訳だと思われるが、寿岳さんの描く寿岳家はそれに勝るとも劣らない完璧な愛と信頼の家庭であった。寿岳さんは「けっきょく、私は私の生き方の大半の根拠を家庭から得たように思う」という。戦前から一貫して変わらぬ志をいだきつづけた寿岳家、「反戦少女」もそんな寿岳家であればこそ生まれたわけである。寿岳さんは、女学生時代の日記（『過ぎたれど去らぬ日々』）出版の動機について、甚だしい右傾化への怒りのほかにもうひとつ「とても変な理由がある」と述べている。ある人から寿岳さんは実は軍国少女だったのではないか（革新論者によくあるように）と疑われて、目に物見せてくれようとはばかり

に証拠として出したというのである。寿岳さんの憤懣やるかたないという顔が浮かぶエピソードだが、「軍国少女」疑惑は自分だけではなく、寿岳家の生きかたに対する侮辱として許しがたかったのではないかと思う。

寿岳さんのいなく寿岳家への誇りと寿岳家の一員であるという自負心は並々のものではなかった。一人前になったあとも家を出て独立しなかったのは、母が病弱だったこと以上に「寿岳ファミリー形成上私もそれなりの重要な位置を持っていたと自認できる役割がおのずとあったゆえ」と述べられている。「一心にがんばって生きている親たち。愛しあい、仕事をし、みごとに家庭を作っている親たち」の娘であることは、寿岳さんにとってなによりも重みのあることであったのである。寿岳さんは、寿岳家の娘として、寿岳家の志の雄弁な語り部の役割を果たしたといえる。

最後に一枚の写真(『思いは深く』所収)について触れておこう。男の人の膝に抱えられて笑顔でポーズする女の子の隣に、「口はへの字、白眼をむいて」立っている六歳、小学校一年生の寿岳さん。本人も認めるとおり「かなりすさまじいしろもの」だが、「斜に構えていて、世の中をにらめてもいた」自分をあらわすということでお気に入りの写真の一枚だそうである。京大大学院でともに学んだ宮地裕氏の寿岳さん第一印象は、「ある日教室に入ると、前列に陣取って後ろのほうをにらみつけているすごい女の人がいた、それが寿岳さんだった」ということで、そのようすはこの写真と通じるところがありそうだ。教室での寿岳さんの表情には、女の入学を拒んできた京大への憤りや恨みがこめられていたと思われる。蓼科のワークショップ参加者にとっての寿岳さんといえば「いつもニコニコ」で、「にらみつける」寿岳さん像はすっかりこないが、若いころの寿岳さんは男社会をにらみつけながら女の問題を考えていたにちがいない。そんなことを思いながらこの写真を改めて眺めみると、これが「お気に入り」とされるところに、幼いころから世界をしっかりと見てきたという寿岳さんのいささかの自負心が感じられておもしろい。わたしの「お気に入り」のエッセーである。

(さたけ くにこ)

寿岳先生の思い出

鈴木 千寿

大学院で「男性のことば・女性のことば」を研究テーマにしたいと言ったら「その分野は寿岳章子で終わっている」と言われたことがありました。

夏のワークショップでご本人にお会いし、それを伝えたところ、「終わりでなく始まりだったのだ」とおっしゃっていただき溜飲がさがったという思い出があります。

パイオニアでいらした先生に続くことができるよう、頑張っていきたいと思いました。

(すずき ちず)

先生との思い出

孫 琦

今度はどんな素敵なお花柄のお洋服で来られるのかなと、毎年わくわくしながら寿岳先生に会うことを楽しみにしていました。先生は蓼科の爽やかな夏に似合うような、上下そろった花柄のお洋服で毎年のワークショップ会場に現れるのです。先生の素敵な笑顔は今も目に浮かびます。

忙しい夏の研究会の合間に、わたしは幸い先生をワークショップ会場とご宿泊先の送り迎えをする役目になって、いつも先生と楽しくお話しをしながらドライブをしました。ワークショップは夜遅くまで話が盛り上がることも少なくなく、先生はほとんど退席されずに、最後まで付き合ってくださいました。細心の注意を払って、夜の山道を運転したことをよく覚えています。

もう一つ自慢できることがあります。それは寿岳先生の手料理が食べられたことです。ある日遠藤先生の別荘でごいっしょしたときのことでした。昼食の時間になり、何かを簡単に作って食べようということになって、先生は「じゃ、わたしが『にゅうめん』というのを作りましょう」といって、てきぱきといろいろな野菜を切り始めました。そして、大きな鍋いっぱいのおいしそうなめんが、あっという間に出来上がりました。あっさりした関西風の薄味のスープで、大変おいしく大評判でした。その味は今も忘れません。先生のとても家庭的な一面も垣間見ることができて、貴重な経験でした。今となって先生とのこんな親密に過ごした一時をととても懐かしく思います。

毎年慣例となった先生の特別講演も、ずっと聞いていてもあきないほど大変面白いお話でした。「研究にも思想がなければだめだ」という先生のおことばは一番印象に残っています。今でもよく思い出して、自分自身に言い聞かせています。ことばを研究する者として、つつい言語事実そのものにとらわれすぎて、何のために研究しているのかを忘れてしまいがちですが、自分の研究テーマ以外にもできるだけ裾野を広げて、もっと広い視野をもって取り組まないといけない、と教えられました。

先生は講演のなかで、次のようなお話をされました。「もちろん国語学者ですから、ことばに関することもがんばっておりますが、一方、社会的なことも忘れることはできないんです。ですから、何もかも一生懸命になってやっているという、そういう日々を送っております。」

先生ご自身は、立派な国語研究者であると同時に、さまざまな社会活動もされました。先生のおことばを胸に、これからの長い研究生生活を有意義に送りたいと思っています。

先生のご冥福をお祈りします。

(そん き)

文体の性差研究に関して

高崎みどり

私は、“文体の性差”についての寿岳さんのご研究から多くの学恩をこうむっておりますので、それについて紹介したいと思います。

樺島・寿岳（1965）から、文体論の基礎的方法を学びました。大学の国語学の授業で、恩師・市川孝先生からこの文献を紹介されたときの面白さを忘れることができません。今に至る方向を決定づけた思い出の1冊です。

また、その中の「女の文章」という章では、「一般によく言われる『女らしい文体だ』というような批評は、こと文章に関するかぎり錯覚に過ぎない」と指摘されてもいます。

後先になりますが、寿岳（1964）では、女性サークルの作文集を資料とし、「調査範囲のみにについて言えば、案外女らしさというものは指摘しにくい」と喝破されていますが、作文の素材の選択のしかたに女らしさを感じさせるものがあるということは、認めている、というところに興味をひかれます。

少し違う角度で寿岳（1966）では、「女性向け」とされる文章の特徴がどのような特徴を持つのか、女性週刊誌の表現について調べたものも大変新鮮な印象でした。

そして、寿岳（1968）で、文学作品などにおいては作者が女性であると知るだけで読み手に喚起される先入観を“予知的文体”と名付けて論じています。

まだまだ、あるのですが、紙幅もつきたのでこれで止めます。寿岳さんの研究分野のほんの一端の、しかも、これらはごく早い時期に属するものですが『日本語と女』につながるものとして大切な文献であると思います。

参考文献

- ・ 樺島忠夫・寿岳章子『文体の科学』綜芸舎 1965 年
- ・ 寿岳章子「女が書けば女らしくなるか」『言語生活』159 号 pp. 66-71 1964 年

- ・ 寿岳章子『レトリック——日本人の表現』共文社 pp. 121-144 1966 年
- ・ 寿岳章子「文体にみる女流文学」『國文学 解釈と教材の研究』13-5 pp. 109-114

1968 年

(たかさき みどり)

「ものを言う楽しさ、ものを言える豊かさ」

高橋 美奈子

私が寿岳さんに初めてお会いしたのは、大学4年次に参加した「蓼科夏のワークショップ」のときでした。当時卒業論文を執筆中だった私は、現代日本語研究会の皆さんのご厚意で、発表の場を与えていただきました。内容は、「男と女のプライベートスピーキング」と題した3世代の夫婦間における家庭内談話の分析でした。公の場での初めての発表ということもあり、「こんなこと言っているのだろうか」「この内容は発表するに値するのか」と、発表後、緊張と不安に押しつぶされそうだった私を、寿岳さんは顔をくしゃくしゃにした満面の笑みで、「これからの時代は、あなたのような若い研究者が活躍することを期待していますよ。東大や京大なんかぶっとばせ!」と仰ってくださいました。寿岳さんのこの発言で、私は緊張の糸がほぐれ、同時にこんな未熟な研究者である私を、研究の分野に招き入れてくださった感を受けました。そのとき、私の中で「ものを言う楽しさ」というものを初めて実感したことを今でも覚えています。

私が寿岳さんから学んだことのもう一つに、「ものを言える豊かさ」があります。性差について研究し始めた当時は、大学生という立場柄、日常生活において性差を感じることはほとんどありませんでした。あれから約10年。就職、結婚、出産、育児、家事・・・と社会生活を経ると、女性と男性とでは、世間から期待されているものに違いがあることを多々感じるようになりました。同時に、世間の当たり前や時代の常識に立ち向かい、自らのことばを発するためには、大変な労力と勇気、それから知識が必要であることも身を持って分かり始めていました。そのような困難に立ちはだかると、人は世間の規範に立ち向かうことを辞め、慣れという行動や世間体という言い訳でごまかし、考えることや表現することをも諦めがちになります。しかしながら、寿岳さんは違いました。今、改めて、寿岳さんの研究と実践の歴史を拝見す

ると、まさに「ものを言い、行動する女性」としての生き様が窺えました。
それは、何人たりと自らの言いたいことが言える世の中こそが平和で豊かな
世の中なのだという寿岳さんからのメッセージが迸っているように思えまし
た。寿岳さんは「ものを言うこと」の楽しさを人一倍ご存知であるがゆえに、
皆が自由に自分の言葉でものが言える土壌作りこそが、ご自身の使命だと考
えていたのでしょう。私自身も現在言葉を研究するものの端くれとして、寿
岳さんが私に教えてくださったことを胸に、日々精進していこうと思います。
寿岳章子さんのご冥福を心よりお祈り申し上げます。

(たかはし みなこ)

「寿岳章子さん」の視点

田中 典子

今、このタイトルを「寿岳章子先生から学んだこと」と書いて、きっとこの場にいらしたら、「お互い『先生』は止めましょう」とおっしゃるのではないかと思い、書き直した。しかし、私にとっては、ごく自然に敬意を込めて「先生」とお呼びしたい方でもあった。

私が寿岳さんを初めて知ったのは、15年ほど前に手にした岩波新書の『日本語と女』の著者としてであった。初版は1979年である。欧米の「言語とジェンダー」研究では、よく先駆者として Robin Lakoff が挙げられるが、その先駆的研究とされる *Language and Woman's Place* (Harper and Row, New York) は1975年に出版されているから、ほぼ同時期にこのような視点が寿岳さんによっても提示されていたということになる。

はじめて『日本語と女』を読んで印象に残ったのは、寿岳さんが職場の用務員さんのひとことから、「あいさつとは、二人の内、どっちが上か下かを確認する一種の儀式でもあったのだ」(p.96)と批判的に述べておられる所で、日々の小さな出来事を大切にして「ことばの意味」を検証していく姿勢に共感した。今でも挨拶をする時ふとそのくだりを思い出すことがある。今回またこの本を広げてみて、そのような日常や、社会的活動、さらに文学と、さまざまな状況のなかで言語と社会の関係を指摘されているのを再確認し、改めて面白いと感じた。是非学生たちにも薦めたい本のひとつだと思う。

実は私はこの会に関わるまで、寿岳さんがどのような方なのかはよく知らなかった。数年前、同僚を通じて蓼科での研修を知り、そのプログラムの講演者に寿岳さんのお名前を拝見して、「日本語と女」を思い出し、大変興味をもって参加したのである。人の年齢を云々するのもまた寿岳さんはお嫌いだろうけれど、その年齢になってもあんなにエネルギーに溢れかつ柔軟なお話をなさる寿岳さんにお目にかかって、まずそのパワーに圧倒された。私はその研修会で、大学生が男女の呼称についてどのような意識を持っているかの

調査結果を発表した。それに関連して、寿岳さんは以前「ご主人」ということばに代わるものとして「おっとさん」というものを提案したが、「おっとせい」みたいだと言われて定着しなかったのは残念だと話してくださった。

私が寿岳さんにお目にかかったのは、ほんの数日であった。しかし、その印象は今もとても鮮明である。研修所を去られる時、手を振って車に乗り込まれたお姿を、とても明るく力強いものとして思い出す。これからも、私にとってその鮮やかさは変わらないことだろう。

(たなか のりこ)

ほほえみの人

早川 治子

私は寿岳さんと合宿などでご一緒したことは、数えるほど1、2回しかないのですが、学んだことは多いと思います。『女とことば』で、私は「ことわざ」と「広告コピー」の類似性、現実世界に対する再構築力を論じたのですが、それは『日本語と女』のことわざに対する寿岳さんの「ことばがあることによって人間をそのことばのように作ってゆく、そういう見方をするようになってしまう」という考えを受け継いだもので、寿岳さんに人口に膾炙するフレーズの危険性を教えていただきました。

寿岳さんのことを思うといつもそのほほえみを思い出します。ご一緒すると誰かれと分けへだてするようなことなく、いつもにこやかにほほえんでご自分から話しかけてくださったことが忘れられません。また直接お話しするようになるずいぶんまえのことなのですが、忘れられない雑誌のグラビア記事があります。それは寿岳さんがご自宅の庭でお気に入りの靴・・・それはそれはたくさんの靴に囲まれて、「日本のイメルダです。」と満足そうなお顔でほほえまれている写真でした。それはフィリピンのイメルダ元大統領夫人の靴のコレクションが話題になっていた頃でした。満足そうなやさしいまなざしが卓越したユーモアのセンスとともに深く印象に残っています。「・・・のイメルダ」のフレーズは靴道楽の友人に会うたびにだいぶ使わせてもらいました。

もうあのほほえみに接することができないのは大変残念ですが、今後そのお教えを指針として行きたいと思います。

(はやかわ はるこ)

追憶・寿岳章子先生

李 奇 楠

寿岳章子先生に初めてお会いしたのは2001年だった。蓼科にある遠藤織枝先生の別荘で。

その年の夏、遠藤先生からのお誘いで、現代日本語研究会が主催する第10回・蓼科ワークショップに参加することにした。8月3日の朝、先生の車に乗せていただき、東京を出て、蓼科に向かった。午後、山の奥に位置する豊かな緑に囲まれた別荘に着いた。

その日の夕食の準備をしようというとき、寿岳先生もワークショップ参加のため、すでに近くのホテルに到着されているらしいことがわかった。それでは、お呼びして一緒に食事をしようということになった。

電話をするや否や、先生はすぐにお見えになった。それが寿岳先生との初めての出会いだった。背が高く、声が大きく、笑顔が輝いている、とても元気な年輩の女性という、そのときの印象が、今も鮮明に脳裏に焼き付いている。その日、食事をしながらいろいろ歓談をした。具体的にどんな話をしたのかはよく思い出せないが、お話がとても楽しく、また初対面の私にも気さくに話しかけてくださる、親しみやすい方だと感じた。その日、私もセロリ一炒めの簡単な料理を一品作ったが、うまく出来なかった。それでも、寿岳先生は私の失敗作を召し上がってくださり、ぱりぱりしておいおいねと褒めてくださったのである。

翌日の8月4日午前、ワークショップの場で寿岳先生の特別講演を聞かせていただいた。「私のたどった道と憲法と」という題で、その概要は本誌22号にも掲載されている。初めて寿岳先生からご自身、ご家族のことなどに関する貴重なお話を伺うことができて、本当によかったと思う。とくに東北大学時代のことや、その後の護憲運動のお話などが印象深かった。1940年代の始めごろ、男女共学が珍しい時代に女子大学生として東北大学で勉強できたのは恵まれていたことなのだろう。しかし、戦争の時代だったので、平和の

年代に生まれ、育った私たちのような者には想像もできない辛い経験もたくさんなさっていた。だからこそ、後の「憲法を護る婦人の会」の実質的な発起人にもなられ、長年にわたってその運営にも携わってこられたのであろう。その意義は今日の日本と世界において極めて大きい。特に改憲の動向が徐々に強まってきている厳しい現実情勢に直面している我々にとって、自分に何ができるのか、どう行動すべきか、40年来の寿岳先生の業績に学ばなければならないところが大きいと思う。

寿岳先生は勇氣ある知識女性であり、どんなことでも積極的に取り組んでいく開拓精神を持つ女性であった。新しい時代の女性リーダーの先駆者であり、理想像でもある。今、寿岳先生を失ったことは、日本、アジアひいては国際社会における女性史上の一大損失と言っても過言ではないだろう。先生のご努力を無にしないためにも、私たち後進の者がその遺志を継いでいかねばならない。

2003年の春、このときも遠藤先生のお誘いで、寿岳先生の京都のお宅を訪ねた。ちょうど桜が満開の時期で、近くのお寺へ出かけてごいっしょに花見もした。

寿岳先生の一生も、桜花のように輝かしく、爛漫たる生涯だった。心からご冥福をお祈りしたい。

(り きなん)